

令和5年度 奈良県立青翔中学校・高等学校 学校評価総括表

【中学校・高等学校用】

年度	令和5年度（中期計画2年目）
本校の使命 (スクール・ミッション)	中高一貫6年間を通じた理数教育の推進により、地域に貢献するとともに、科学技術創造立国たる日本の未来を牽引するサイエンスイノベーターを創出します。
年度重点目標	科学技術人材育成に向けた探究的な学びと授業改善の推進

1 スクール・ポリシーの内容

	入学者の受け入れに関する方針 (アドミッション・ポリシー)	自然科学の分野で社会に貢献できる人材の育成を目指し、以下のような生徒を求めます。 (1) 科学的な現象を探究しようとする意欲をもち、物事を論理的に粘り強く考えるための土台となる数学が好きな生徒 (2) 将来、科学研究活動を通して社会に役立ちたいと願い、実験・観察や理科に興味・関心をもち、自ら進んで課題の発見や解決に努めようとする生徒 (3) 基本的なコミュニケーション力を身に付け、仲間と協働できる生徒
	教育課程の編成及び実施に関する方針 (カリキュラム・ポリシー)	中高一貫6年間を通じた理数教育を、以下のように推進します。 (1) 全校体制での探究的な学びの充実 (2) STEAM教育の視点に立った教科等横断的取組 (3) SDGsを活用した地域課題を解決するための自治体・企業等との連携 (4) 中高一貫理数教育の特色を生かした体系的カリキュラムの編成 (5) 高次の研究を実現させるための国内外の大学等との継続的な連携 (6) 異学年集団の学びによる科学的リテラシーの習得
	育成を目指す資質・能力に関する方針 (グラデュエーション・ポリシー)	サイエンスイノベーターとして必要となる、以下の資質・能力の育成を目指します。 (1) 課題発見・解決・設定に必要な創造的思考力 (2) 科学的根拠に基づいた総合的判断力 (3) 多様な考え方を尊重しチームで協働するコミュニケーション能力

2 奈良県教育振興基本計画（「奈良の学び推進プラン」）が示す各テーマごとの学校教育目標

テーマ	学校の教育活動に関する目標(A)	計画期間における具体的目標(B)	令和5年度末の目標値等(C)	令和5年度末の状況(D)	自己評価(E)	学校関係者評価(F)	改善方策
(1) 心身ともに成長を促す	基礎的な体力の向上	各自の体力の向上 スポーツテストのA・B判定が30%以上	各自の体力の向上 スポーツテストのA・B判定が27%以上	・スポーツテストの結果、A・B判定が27%を超えた学年は、中高6学年のうち4学年であり、体力が低い状態である	C	C	・様々な運動を日々の体育の授業で取り入れ、運動に対する興味関心を高める
	望ましい生活習慣の確立	朝食摂取率が90%以上 睡眠時間6時間以上が80%以上	朝食摂取率が85%以上 睡眠時間6時間以上が75%以上	・アンケート結果より朝食摂取は全ての学年で80%を超えているが、睡眠時間6時間以上が75%は中1のみであり、特に高校生の睡眠不足が危ぶまれる	B	C	・三者面談や保護者会で啓発する ・保健便り等で保護者に啓発する
	自身の健康管理	歯科検診などの治療勧告後の受診率が80%以上	歯科検診などの治療勧告後の受診率が70%以上	・受診勧告後の受診率は、視力が53.7%、歯科が46.4%と低い状態である	B	C	・一斉メールで保護者に受診協力を依頼したり、三者面談で保護者に受診依頼用紙を再度配布したり、保健便りやホームページで啓発する
(2) 学ぶ力、考える力、探究する力を高める	主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善	授業アンケートの「授業に学ぶ楽しさを感じますか」の肯定的な回答が70%以上 生徒の意識調査の「自ら取り組む姿勢（自主性、やる気、挑戦心）」が身に付いたという回答が80%以上	授業アンケートの「授業に学ぶ楽しさを感じますか」の肯定的な回答が70%以上 生徒の意識調査の「自ら取り組む姿勢（自主性、やる気、挑戦心）」が身に付いたという回答が75%以上	・授業アンケートの「授業に学ぶ楽しさを感じますか」という質問について、肯定的な回答は72.6%であった ・SSH意識調査より「自ら取り組む姿勢（自主性、やる気、挑戦心）」が身に付いたという回答は、72.9%であった ・「探究的な学びに関する授業改善シンポジウム」を実施した（11月）	B	A	・授業アンケート結果を、教員の自己評価の材料とし、更なる授業改善を推進する ・主体的・対話的で深い学びをターゲットにした公開授業の実施を行う
	学習意欲の向上	ジェネリックスキルテストの学習意欲に関する領域の得点を伸ばした生徒が50%以上	ジェネリックスキルテストの学習意欲に関する領域の得点を伸ばした生徒が40%以上	・GSテストのうち、学習意欲に関連する領域（特に自己調整力と好奇心）の得点を伸ばした生徒は、41.9%であった	A	A	・各教科で非認知能力の向上を図るための目標を設定し、授業展開を行う
	探究的な学びの推進による、主体性、独創性の養成	生徒の自主性、独創性が身に付いたという回答が、ともに70%以上	生徒の自主性、独創性が身に付いたという回答が、ともに65%以上	・SSH意識調査より、自主性、独創性が身に付いたという回答は、69.4%であった	A	A	・生徒による相互評価活動について各教科で実施し、更なる充実を図る
	ICTを活用した授業改善	教員の情報活用指導力の取得が80%以上	教員の情報活用指導力の取得が75%以上	教員のICTの活用率は85.2%と高く、昨年度(69%)より大きく向上している	A	A	・授業公開等を通してICTを活用した授業の更なる推進を図る
	学校における働き方改革	学校行事を精選・マニュアル化し、教員の業務を軽減する	学校行事に関するマニュアルを2つ以上の行事で作成	・校外学習や文化祭のマニュアル化 ・SSH関連行事のマニュアル化 ・各種アンケートの見直しと削減	A	A	・行事の精選とマニュアル化をすすめる、業務の効率化と軽減を図る
(3) 働く意欲と働く力を高める	インターンシップの充実と産業界との連携	中学校職場体験及び高校インターンシップ(教育研究所主催等)への参加で「良かった」という回答が80%以上、職場見学や企業の研究開発等に関わる講演会の実施で「良かった」という回答が80%以上	中学校職場体験及び高校インターンシップ(教育研究所主催等)への参加で「良かった」という回答が75%以上、職場見学や企業の研究開発等に関わる講演会の実施で「良かった」という回答が75%以上	・「良かった」の回答は、中3・高1進路講演会が66%、中2職場見学会が99%、中2職場体験が100%、高校インターンシップが100%（今年度のインターンシップ及び看護体験参加者は合わせて18名） ・最終学年在籍生徒数(72名)に占めるインターンシップへの在学中の参加生徒数は4名	B	B	・高校ではインターンシップ等への参加を促すことにより、高い進路目標を早期に決定するきっかけとさせる。 ・中学校では職場体験やキャリアセミナーを今後も更に充実させ、普段の学校生活では体験できない経験を多く積ませる。
	キャリア教育の推進	社会への参画を見据えた大学や企業での研修・共同研究の実施筆記試験だけに頼らない総合型・学校推薦型選抜に出願する生徒の割合を20%以上	社会への参画を見据えた大学や企業での研修・共同研究の実施筆記試験だけに頼らない総合型・学校推薦型選抜に出願する生徒の割合を20%以上	・中高とも進路講演会の実施 ・地元企業との協働による商品開発 ・奈良先端科学技術大学院大学のチャレンジプログラムへの参加 ・国公立大学の総合型・学校推薦型選抜に出願する生徒の割合が23.6%	A	A	・大学や研究機関、地元企業との連携を更に深め、探究活動や大学見学会等を通してさらに高度な学びを追求しようとする気持ちを持たせる ・進路講演会の内容を適切かつ充実させ、高い進路目標を実現しようとする意識を持たせる
	ジェネリックスキルの伸長	STEAMの観点を加えた本校独自のジェネリックスキルテストを開発し、生徒の非認知能力の向上を図る	ジェネリックスキルテストにおいて総得点を伸ばした生徒が40%以上	・GSテストのうち、学習意欲に関連する領域（特に自己調整力と好奇心）の得点を伸ばした生徒は、41.9%であり、目標を達成している	A	A	・ジェネリックスキルテストを活用して非認知能力の向上を図り、生徒個々の状況と6年間を見据えた指導を教員間で情報共有をする
(4) 地域と協働して活躍する人を育てる	地域の課題を発見し、解決する力の養成	生徒の課題発見力、課題解決力が身に付いたという回答がともに80%以上	生徒の課題発見力、課題解決力が身に付いたという回答がともに75%以上	・意識調査の結果、課題発見力、課題解決力が身に付いたという回答がともに70% ・地元企業との共同開発を行った	A	A	・探究的な学びをすべての教科で推進し、課題発見力や問題解決力を伸ばす
	海外交流校等との協力による国際性の養成	生徒の国際性が身に付いたという回答が60%以上	生徒の国際性が身に付いたという回答が50%以上	・国際性が身に付いたと回答した生徒は44%であった	B	C	・主にオンラインでの交流を通して国際性を養う ・サイエンスフェアで海外交流校と交流
(5) 地域で個性が輝く環境と仕組みをつくる	発達段階に応じた人権教育の推進	中高6年間を通じ、発達段階に応じた体系的な指導計画やプログラムに基づくLHRや行事を実施	中高6年間を通じ、発達段階に応じた体系的な指導計画やプログラムに基づくLHRや行事を各学年2回実施	・LHRや行事は発達段階に応じて、各学年2回以上実施した ・人権講演会は「認知の働きから考えるダイバーシティ」の演目で実施した	A	A	・具体的な数値目標の設定や、生徒の感想やメッセージなどの統計的な分析を行い、次年度の指導案に生かす
	学校いじめ防止方針に基づく取組の推進	「いじめアンケート」や「心と生活に関するアンケート」の結果に基づいて個別面談が必要な生徒との面談（年間2回以上）の実施及び職員間の情報共有の推進	「いじめアンケート」や「心と生活に関するアンケート」の結果に基づいて個別面談が必要な生徒との面談（年間2回以上）の実施及び職員間の情報共有の推進	・県下一斉アンケートや学校独自の「いじめアンケート」を2回実施し、必要な生徒に対しては、SCと連携して定期面談を行い、職員会議等の機会に情報交換をすすめている	B	B	・生徒指導に関する情報共有フォルダの活用を更に進め、6年間を通じた継続性のある指導を目指す ・日常的な情報交換の機会を充実させ、個別最適な指導を目指す
	個別の教育支援計画や個別の指導計画の活用	対象となる生徒の状況の全職員による共有と、対象生徒の保護者との個別面談（年間2回以上）の実施	対象となる生徒の状況の全職員による共有と、対象生徒の保護者との個別面談（年間2回以上）の実施	・対象生徒の保護者と、年間2回（1学期・2学期3者面談時）、個別に面談を実施した	A	A	・特別支援教育支援員との連携を更に充実させ、個別最適な学びの実現を目指し、学校全体で取り組む体制を構築して生徒の困り感に寄り添っていく

※(E)・(F)の評価基準…A：十分達成できている B：概ね達成できている C：改善が必要である

3 評価結果の分析、今後の改善方策等

概ね、中期計画（2年目）の目標値を達成しているが、生徒の健康維持・増進に向け、体力の向上と睡眠時間の確保、検診に関する治療勧告後の受診率向上について改善が必要な状況である。健康な体づくり、基礎的な体力の向上と望ましい生活習慣の確立に向けて、日頃から運動や健康管理に関する生徒への意識付けを図るとともに、保護者への協力を様々なツールを活用して促していく。また、学校満足度「本校に入学して（させて）良かった」は、「とてもそう思う・そう思う」の回答が、生徒は78.5%、保護者は88.7%であった。